

中学校におけるキャリア教育の創造 (1)

—総合的な学習の時間におけるキャリア教育プログラムの開発—

上田 邦夫 今崎 英明 阿部 哲久 鬼木 智子
鹿江 宏明 萩原 恵美 松前 良昌 朝倉 淳
神山 貴弥 神原 一之

1 はじめに

平成11年12月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」で初めて「キャリア教育」という文言が登場して以来、「キャリア教育」を視点とした教育課程編成のあり方の見直しや勤労観・職業観を育成する取り組みが報告され始めた。しかしながら、従来行われてきた職場体験学習や工場見学などのキャリア教育は単発的な取り組みにとどまり、勤労観や職業観を確実に身につけられるような、継続的、体系的な取り組みとなっていないことが課題としてあげられる。したがって、変化の激しいこれからの社会に活躍できる人間を育成するためには、これまで以上に産学が連携を図り、時代の変化にリアルタイムに対応できるキャリア教育プログラムを構築することが求められる。

そこで本研究では、産業界と連携を図り、生徒の自立を支援するキャリア教育プログラムを実践的に開発し、中学校における新しい「キャリア教育」のあり方を提案しようとするものである。キャリア教育を推進するにあたっては、「キャリア発達には、児童生徒が行うすべての学習活動が影響するため、キャリア教育は、学校のすべての教育活動を通して推進されなければならない(2004 文部科学省)」とあるように、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間における取り組みが「キャリア教育」という視点に立ち、「有機的に関連づけられているのか」また「全体として体系的な取り組みがなされているのか」点検、見直し再構築する必要がある。とりわけ、「総合的な学習の時間」はその理念・目的において、「キャリア教育」と共通している部分が多い。そこで本年度の研究は、その1年次として、総合的な学習の時間を「キャリア教育」の視点で見直し、体系化し、計画的、組織的に実施することが

できる教育プログラムの開発を目指そうとするものである。

2 キャリア教育の定義

「キャリア」については、個々人がたどる行路や足跡、経歴、あるいは特別な訓練を要する職業、職業上の出世や成功、生涯の仕事などを表す言葉として広く用いられている。

文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」では、「キャリア」を「『個人』と『働くこと』との関係の上に成り立つ概念」と位置づけ、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係づけや価値付けの累積」と定義している。

「キャリア教育」は、一人一人が将来に向けて自分にあった生き方を主体的に選択できる力を伸長すべく生涯にわたって展開されるべきものであるが、とりわけ学校教育では、次の定義が用いられる。

『『キャリア概念』に基づいて、児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育(文部科学省2004)』

本研究は、産学の連携により、将来の社会のリーダーたる人間を育成する「キャリア教育」を中学生を対象に展開しようとするものである。ここでいう社会とは、職業生活・市民生活・文化生活の3つの側面から捉えた社会生活を意味する。したがって社会のリーダーの具体的な姿としては、「将来仕事をもち職責を果たしていく人間、経済・社会の維持発展を支えていく人間、民主主義社会の一員として社会問題に関心をもち直

接・間接に政治に関わる人間，地域活動や市民活動に積極的に参加する人間，自らの教養・知識・技能を高めていこうとする人間，文化活動に関わる能力と意欲をもった人間」などを想定している。

こうした社会のリーダーたる人間になりたいという夢を生徒一人一人に抱かせ，そして，夢を目標にすべく，実現の可能性と方法をみせ，生徒一人一人の自己実現を目標とする教育が我々の目指すものである。

そこで，本研究における「キャリア教育」の定義を

生徒一人一人が社会につながる夢をもてるよう支援し，夢を目標にするための方法を発見させ，自己実現に向けての意欲・態度や能力を育てる教育

とする。

具体的に広島大学附属東雲中学校（以下 本校）において「キャリア教育」の実践を通じて目指すことは以下の通りである。

- ①「学校の学習」と「社会」を結びつける学習や体験を通して，夢をもたせ生徒一人一人の「学ぶ意欲」や「社会貢献への意欲」を引き出す。
- ②生徒一人一人にこれからの社会で求められる諸能力を育成，伸長する。
- ③キャリア教育を推進できるように教員一人一人の資質向上をはかる。
- ④産学が連携したキャリア教育を推進できる教育システムを構築する。

3 研究の計画

(1) 第一年次

総合的な学習の時間において，特にコミュニケーション能力やマネジメント能力の育成を目指したキャリア教育プログラムの開発を行う。そのために，産学連携によるカンファレンスを定期的に行い，各界のプロフェッショナルを効果的かつ継続的に教育実践に取り込むことができるシステムを構築する。

(2) 第二年次

第一年次の実践をふまえ，開発した教材やカリキュラムに加え，教科教育や特別活動なども含めた教育課程の中にキャリア教育プログラムを位置づけ，実践し，その評価・検証を行う。

(3) 第三年次

第二年次の評価を受け，中学校3年間を見通した系統的なキャリア教育プログラムのモデル化を行う。

4 研究の内容

(1) 本校におけるキャリア教育の視点と総合的な学習の時間

本校では，義務教育終了段階でめざすべき人間像を「自分を見失わずに異なる文化や異なる価値観を受容し，情報を活用しながら他者とのコミュニケーションを積極的に展開でき，よりよい意思決定を目指し行動しようとする人間像」と設定し，その目標に向かって，必修教科，選択教科，総合的な学習の時間などの教育内容をどのように構築するのか，2001年度より実践的・実証的に検討を続けている。これら実践研究から本校では，総合的な学習の時間で育成する資質・能力を「表現・コミュニケーション力」「課題設定力」「課題解決力」「学び方」「ものの見方・考え方」に整理している。

「表現・コミュニケーション力」とは，「自分の知識や信念・感情・意思を，相手の状況や社会的立場に応じて適切な媒体を用いて，効果的に表現・伝達する力」である。特に，表出に焦点を当てた表現になっているが，コミュニケーションを成立させるためにメッセージの送り手の意図を汲み取ろうとする力もこの力を構成する重要な力である。次に「課題設定力」は，現状と目標（理想とする姿）のずれを認識する力であると考える。続いて「課題解決力」は，課題を解決していくために行動していく力である。つまり，Plan・Do・Check・Actionの遂行において重要な力であると考える。さらに「学び方」は，学習を進めていく構えを身につけることである。例えば，柔軟で多面的に考えようとする姿勢，あきらめずにねばり強く取り組む姿勢，友達と協力して取り組む姿勢，活動をふりかえろうとする姿勢などがあげられよう。加えて「ものの見方・考え方」は，よりよい自己実現を目指した生き方を考えることができる力である。そのためには，根拠を明らかにしながら筋道を立てて考える科学的な思考方法を身につけたり，自己のあり方や生き方と結びつけ，社会への貢献を意識した活動を考える力や道徳性を高めたりすることが求められる。

本研究においては，このようなねらいをもって実施している総合的な学習の時間とキャリア教育のめざす力との関連性を捉えることが重要であると考ええる。

キャリア教育で育成を目指す諸能力については，国立教育施策研究所生徒指導研究センターの「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」に示されている「職業観・勤労観」の形成に関連する能力が参考になる。表1は，「枠組み（例）」に示された領域・能力と本校の総合的な学習の時間でめざす力との関連を表したものである。なお，総合的な学習の時間で育成をめざす能力や態度は，多岐にわたり関連があると考えられるが，その中でも特に関連が強いと思われる能力や態度のみを記述している。

総合的な学習の時間のねらいは、キャリア教育のねらいとよく似ており重要な役割を担う。しかしながら総合的な学習の時間で特にその役割を果たせる場面は、ボランティアや社会体験、見学や調査、発表や討

論などの体験的学習を通しての「学び方やものの見方・考え方、そして課題設定力や問題解決力、表現・コミュニケーション力」の育成であろう。

表1 職業的発達に関わる諸能力と総合的な学習の時間でめざす力

職業的（進路）発達に関わる諸能力			本校の総合的な学習の時間でめざす能力・態度	本校の総合的な学習の時間の内容
領域	領域説明	能力		
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ●自他の理解能力 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力 ●コミュニケーション能力 多様な集団・組織の中でコミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力 	<ul style="list-style-type: none"> ●ものの見方・考え方 ●表現・コミュニケーション力 	図表表現（2年） 口述表現（2年） 映像表現（2年） 身体表現（2年） リスニング（1年） プレゼンテーション（1年） インタビュー（1年） 研究（3年）
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割およびその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	<ul style="list-style-type: none"> ●情報収集・探索能力 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の生き方を考えていく能力 ●職業理解能力 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力 	<ul style="list-style-type: none"> ●表現・コミュニケーション力 ●課題解決力 ●ものの見方・考え方 	アンケート（1年） インタビュー（1年） リスニング（1年） プレゼンテーション（1年） 図表表現（2年） 口述表現（2年） 映像表現（2年） 身体表現（2年） 研究（3年）
将来設計能力	夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	<ul style="list-style-type: none"> ●役割把握・認識能力 生活・仕事上の多様な役割や意義およびその関連などを理解し、自己の果たすべき役割などについての認識を高めていく能力 ●計画実行能力 目標とすべき将来の生き方や進路を考えそれを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動などで実行していく能力 	<ul style="list-style-type: none"> ●課題設定力 ●ものの見方・考え方 ●課題解決力 ●ものの見方・考え方 	インタビュー（1年） アンケート（1年） 研究（3年）
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	<ul style="list-style-type: none"> ●選択能力 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力 ●課題解決能力 意志決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路実現に向け、自ら課題設定してその解決に取り組む能力 	<ul style="list-style-type: none"> ●課題設定力 ●課題解決力 ●ものの見方・考え方 ●課題解決力 ●学び方 	研究（3年）

(2) 総合的な学習の時間におけるキャリア教育の推進方法

「キャリア教育」を総合的な学習の時間で推進するにあたっての基本方針は以下の通りである。

特に、①を推進していくためには、家庭や地域、企業の理解と協力が不可欠である。そのために本校では、

- ①リアルな体験的な学習（異文化・非日常体験、ふれあい体験、矛盾体験）や問題解決的な学習を積極的に取り入れること。
- ②一人一人のキャリア発達を支援していくために、自己評価カードやポートフォリオ等活用しながら継続的・統合的に自己の発達を評価できるようにすること。

「21世紀の社会に活躍できる人間を育成するために、これからの教育はどうあるべきなのかを追求すべく、学校現場・大学・保護者・地域社会が協力し、全国の教育モデルとなる東雲中学校の教育実践に寄与すること」をねらいとして「協力者ネットワーク会議」を組織し、趣旨に賛同していただけた方を中心にスタートした。その構成としては地元企業（中国新聞社副社長、広島ガス株式会社広報企画室室長、ディアフォロン会長）、地域（広島市仁保公民館長）、家庭（PTA会長）、大学（広島大学大学院助教授）、本校（管理職・総合担当者）が現在のメンバーであり、今後発展させていく予定である。

この会議では、本校の総合的な学習の時間の取り組みについて、それぞれの立場からご意見やご助言をいただくことができた。家庭・地域・企業そして学校が一体となった教育活動を展開するうえでのサポートの核となる会議となっている。

また、総合的な学習の時間のプログラムを立案・実施していく上で、恒常的に企業（広島ガス株式会社・株式会社ディアフォロン）とコラボレーションを図っている。このことで、生徒はもちろん、教師自身も多様な幅広い交流を持ち、広い視野に立った教育プログラムを作成することができている。また、その道のプロと生徒たちが直接対話することで、夢や希望の源となる感動を得たり、現在の学習の意義を感じたりすることができている。

以下に各学年の実践例を記す。

5 実践例

(1) 第1学年

第1学年における総合的な学習の時間では、本校のめざすべき人間像の基礎・基本の一つと考える「表現・コミュニケーション力」の育成を一つのねらいとし、中でも情報活用能力の育成に重点をおいて学習を展開していく。その理由は、本校では20校以上の小学校から生徒が入学してくるため生徒の入学前の総合的な学習での体験や学びは様々であり、最初の1年間の学習

で今後の研究を進めるうえで必要となる情報活用能力をすべての生徒に身に付けさせることが必要と考えたからである。

年度当初、生徒が自らどんな力をつけたいかという目的意識を明確するために、5時間かけて学年全体でオリエンテーションを実施する。その中で、教師が各講座ごとの目的や概要を説明し、生徒に自分の目標を考えさせるとともに目的意識を明確化させる。また、企業活力支援士による特別講座も開催し、教師とは違った角度からのアプローチもしていただく。さらには、年に数回の特別講座を開講し、多方面からの講師を招聘していく。

各講座は、企業活力支援士の支援・協力のもと、情報の収集・整理・表現という一連の流れを考えて開設する。方法としては、すべての生徒が前期・後期ともにすべての講座を受講できるよう、学年を4グループに編成し、前期は1講座を6時間単位、後期は1講座を4時間単位で、計2回ローテーションする。このグループを単位とした方法では、常に学習集団を意識させながら集団の中で自分の役割を的確に把握し、行動する力を育成するとともに、集団の中でお互いのかかわりを深めていくことが出来るような支援・指導となるように留意している。

具体的な4つの講座における目標と学習内容は、以下の通りである。

①インタビュー

インタビュー講座の目標は、実践を通してインタビューの方法を学び、課題を解決するためのコミュニケーション能力を高めることとする。前期は、インタビューレッスンを通して、インタビューのコツを見つけることに焦点を当てて学習していく。また、「本物」にふれることで、そのテクニックを実感させていく。後期は、校外の方々へインタビュー体験を通して、インタビューのコツを実践するとともに、応用力も身に付けさせたいと考えている。

②アンケート

アンケート講座では、「企画・作成・実施・集計・分析」する力を身に付けることを目標とする。高度情報通信社会に発展した我が国において、学校には「情報活用能力」の育成が強く求められている。そこで前期は物を販売したい場合のアンケート作成・実施を通して「情報を収集する力」に視点をあて、後期はそのアンケート結果を分析・考察する学習を通して、「情報を処理する力」に視点をあてて実践していく。

③リスニング

「リスニング」とは、元来「意味を理解するために注意をはらう」という意味である。この講座では、受信能力を向上するために、「集中して聴く」という活動を中心に、脳の活性化をはかる様々なトレーニングをしていく。前期は音や音楽・言葉などを注意深く聴くことからはじめ、音楽から場面を想像したり音を創造するなど、聴いたことを理解し発信する学習をする。後期は目・鼻・気配など、人間の感覚を研ぎすますための様々なトレーニングを実施する。また傾聴トレーニングとして、聴いた言葉を即座に反復するシャドーイングと聴いたことを要約する学習を年間を通じて毎回実施し、継続することによるリスニング力の向上をはかる。

④プレゼンテーション

プレゼンテーション講座では、話し方や資料などを工夫して、相手に伝える力を高めることを目標とする。前期は自己PRを通して、後期は世界の国々を紹介する活動を通して、伝わる喜びや伝える楽しさを体験させていく。これらの学習から、発信するだけでなく相手を受容することを意識させ、心や気持ちを大切にしたいプレゼンテーション力を身につけさせたいと考えている。

各講座および特別講座での学習内容は、自己評価カード、ポートフォリオの作成、および年度末の発表交流会を通して振り返りをおこない、学習の定着をはかる。また、同時期に2年生前期の概要も紹介することで、スムーズに第2学年での学習につなげたいと考えている。また、生徒が自己評価した内容に対しては、授業者がその都度インタビュー形式で指導・支援も行う。そして、授業内容やその授業における生徒の姿勢、学習を通してつけた力などを保護者に説明するために、その評価用紙を通知票とともに各期末に保護者へ開示し、第1学年の「総合的な学習の時間」の一連の取り組みに対して保護者とも連携を取りながら進めていく。

第2学年後期からの「研究」を推進するための基礎的・基本的事項を整理し、改善を加えながら実践を行うことができた。講座のローテーション形式による学習は、すべての生徒に実社会で働くプロから将来にわたって必要となる情報処理能力を高める指導を直接受ける機会を与え、プロの姿を目標として具現化することができ大きな成果を得たと考える。

(2) 第2学年

国際化が進む中これからの未来を担う子どもたちに求められている力の一つとして、自分の考えを主体的

に表現する力が考えられる。

第2学年では、各教科において十分時間をかけて扱えなかったり、直接扱うことがなかったりするが、今後の生活や第2学年後期以降の「研究」に有用であると考え「表現・コミュニケーション力」を育成することや各教科で育成された「表現・コミュニケーション力」を総合的に活用するために、4講座を開設してローテーション形式で学んでいる。第1学年と同様に学年を4グループに編成して、1講座を5時間単位でローテーションして実施した。各グループは、学級を基本に集団の中で自らの役割を意識して、お互いを認め合いながら活動できるように留意して編成された。

4つの講座は、図表が表現にもたらす効果とその方法について学習することを通して、表現力を高める「図表表現」講座、実際に映像を編集する体験を通して、映像を見るときに必要な映像言語を理解する力や作り手の意図を読みとる力をつける「映像表現」講座、プロの話し手にならない、話し方の向上をめざした練習活動を通して、表現・コミュニケーション力を高める「口述表現」講座、言葉やイラスト等を用いずコミュニケーションをとる活動を通して、互いの意思伝達や自己表現できる力を高める「身体表現」講座である。各講座は、専門的な知識をもった講師を必要に応じて招聘し、情報の収集・整理・発信・表現などを学ぶ時間を設ける。

指導においては、生徒自身に「なぜこのような力が必要であるか」「誰に対して表現するか」など目的を意識化させるよう留意している。

具体的な4つの講座における目標と学習内容は、以下の通りである。

①図表表現

「図表表現」講座では、新聞に折り込まれる広告を調べて、その効果的な表現について分析したり、実際に自分たちで身近な物の広告をつくってプレゼンテーションを行う。広告を分析し、広告をつくることで、どうやったら伝えたい内容を効果的に伝えることができるか考えさせる。そして、お互いに制作した広告を評価することで、広告作りの視点について考えることができるようにする。

②映像表現

「映像表現」講座では、テレビ局で映像制作に携わる方を講師として招聘し、映像製作について説明を受けた後、班ごとに学校生活の一場面を撮映、編集し、ショートストーリーの映画を制作して鑑賞する。映像を組み合わせ、効果音やBGMをつけ、わかりやすい題名を考えることを通し

て、作り手の意図を反映した映像作りを学び、お互いの作品を鑑賞することで、映像を理解し、作り手の意図を読みとる力を高めるようにする。

③口述表現

「口述表現」講座では、元アナウンサーを講師として招聘し、発声練習の仕方、心構えなどの指導を受ける。発声の練習を通して、身体を使った呼吸の仕方、発音の仕方などを楽しく学べるようにする。その後、実際のテレビのニュース、広島大学の紹介ビデオ、アニメーションの原稿を映像に合わせて読む実践を行う。それぞれの映像に合った読み方で工夫してナレーションを行い、効果的な話し方を学習する。

④身体表現

「身体表現」講座では、演劇のプロを講師として招聘し、プロの身体表現を見た後、二人一組になって、向かい合い、鏡のように真似をして表現するなどゲーム形式で身体表現を行う。言葉を使わないで伝えるためには、大きな動作で、ゆっくりと動くことなど身体で表現するうちに効果的な表現の仕方に気づかせ、指導を通して、恥ずかしさを乗り越え、表現する楽しさを味わうことができるようにする。

学習の中では発表を見てお互いに質問を行い、良かった点や改善すべき点をコメントしながら相互評価をする。制作した作品を鑑賞して感想を発表したり、指導者は生徒の発言に耳を傾けて否定的な評価になっている生徒には助言する。また自己評価が甘くなってしまう生徒には課題を明確にして学習に取り組めるようにする。また、講座のねらいや内容に基づいて、それぞれの学習に応じて自己評価表を作成している。講座の学習後に生徒は自己評価表を使って、活動を振り返りながら自ら評価を行う。

各講座に分かれてそれぞれのねらいに応じて実践をしていくことで、伝えたい内容を考えさせながら表現技術を磨いていくことができ、伝えたい相手を意識した上で工夫していくことが大切であることを理解させることができた。

各分野で活躍される方を講師として招聘したことは、より社会に根ざした視点で学習を捉えることができ、活動が深まることにつながった。本年度は、「映像表現」「口述表現」「身体表現」の3講座において、講師を招聘できた。来年度は、全ての講座において各分野で活躍される方を講師として招聘することで、更によりよい講座になると考える。コーディネーターとの連携は重要であり、ミーティングを通じて学校の意図

を確実に伝えるとともに学校外の視点を吸収しようとする姿勢が必要である。

(3) 第3学年

第3学年では「研究」として、2年間を通じて育成した基礎的な力を活かしながら、社会との直接的な体験的学習や問題解決的な学習の実践を通じて、日本社会の情勢や国際社会の将来像を認識させている。特に企業や米国姉妹校と連携して教育プログラムを作成することにより、異文化体験やふれあい体験などを効果的に取り入れられ、問題解決的な学習に結び付けることができている。その中で、「表現・コミュニケーション力」「課題設定力」「課題解決力」「学び方」「ものの見方・考え方」を核とした学習を推進することで、「学ぶ意欲」や「社会貢献」への意欲を引き出し、これからの社会の中で主体的に発信し、貢献していくために必要とされる基礎的・基本的な力の育成をねらいとして取り組んできた。

第3学年の「研究」の学習活動の形態には、学年の生徒全員が一斉に学習をする活動と、テーマをもとに学年の生徒が各グループに分かれて学習する活動の2通りを設定している。

全員一斉の学習活動では、広島に拠点を置いて日本や世界の中で活躍している人たちから直接的な指導を受ける場を設定している。具体的には映画監督や写真家など、表現活動に関わる方々を講師に招聘して講演会を開催し、生徒の表現・コミュニケーション力の育成をめざした指導を実施している。同時に、その道のプロと生徒が直接対話したり、自己実現の過程での課題や葛藤を克服しながら社会で活躍を続けている講師の方々の生き方にふれることで、夢や希望をもって将来の生き方や生活を考える機会ともなっている。

また、生徒にとって本学習の意義と位置づけを明確化させるために、企業（広島ガス株式会社）の経営企画室長や人材育成コンサルティング会社（株式会社ディアフォロン）会長を講師として招聘し、学年の生徒全員にこれからの社会の中で求められる資質や能力、考え方について指導をしていただいている。

これらの授業実践については、企画立案段階から広島ガス株式会社・株式会社ディアフォロンの全面的な支援協力を得ている。これにより生徒たちが社会に出たときに求められる力を、企業協力者と本校教員が、産業界と教育現場というそれぞれの立場をこえた広い視野から検討し、教育プログラムを作成することができている。

各グループに分かれた学習活動では、現代社会における様々な課題の中から「環境」「国際」「福祉」の3課題を選択し設定している。また、「国際」については

米国との交流、及びインドネシアとの交流の2グループに分けているので、合計で4グループ設定している。このうち、「環境」グループと「国際（インドネシア）」グループについては、広島ガス株式会社とのコラボレーションによる授業であり、社内の協力者と本校授業者とが日常的に連携し、立案及び実践をしている。

なお、生徒のグループ所属については、前年の実践開始時に各グループ指導者がオリエンテーションを実施し、その後生徒の希望をもとに、指導者と生徒が相談しながらそれぞれの所属を決定している。

これら一斉学習とグループ別学習を、1年半を通してバランスよく編成するとともに、一定期間ごとに学習の整理や中間発表会、評価場面を設定し、個々の生徒における学習の成果と課題を確認させることで、社会につながる夢をもてるとともに、夢の実現に必要な基礎的・基本的な力の育成をめざしている。

次にグループ別学習における各グループの講座内容をあげる。

①「環境」グループ

「環境」グループは、自分たちの生活と環境との関係をテーマとして、コース共通の課題「エネルギー資源がもたらす環境への影響は」「地球にやさしく、効率のよいエネルギーとは」を設定し、広島ガス株式会社と共同で授業を立案し実践している。具体的実践内容としては、広島ガス廿日市工場におけるエネルギー効率利用の現地学習や、エコッキング教室体験による生活と環境との関係の考察などのような直接体験学習を行った。企業とコラボレーションを図り、体験学習の内容を精選し計画的に行ったことで、単なる工場見学やエコ教室にとどまらず、学習したことを本校のエネルギー消費や環境の現状把握、課題設定や目標達成のための方策の追求、環境宣言や環境ロゴマーク、環境行動指針の作成など、日々の学校生活とその環境に注目し、課題を見出す活動に発展させていくことができている。

これらの実践を通して「環境」グループでは、自分たちが生活している身近な場所の環境保全に向けて主体的に行動する力や、よりよい環境をコーディネートする力の育成、および幅広く解決方法を探求する資質・能力の育成をめざすとともに、企業の社会貢献への取り組みを学ぶことを通して自分たち自身も社会に貢献しようとする意欲を引き出すことをめざしている。

②「国際（Exploris）」グループ

「国際（Exploris）」グループは、本校の姉妹校である Exploris 博物館立 Exploris Middle

School（以下 E.M.S.）との交流を核に活動を行っている。本校は1999年から米国ノースカロライナ州のチャータースクールである E.M.S.と交流を行っている。開始当初は教員の相互訪問による交流が中心であったが、やがて生徒間交流に発展し、2001年には両校間の姉妹校提携を行った。また、その後は両校生徒の相互訪問も含めた交流にまで発展し、現在は相互交流から共同・協同関係へと飛躍しつつある。そのような背景の中で本グループは、広島大学 Global Partnership School Center とも連携をしながら、E.M.S.との共同研究に取り組んでいる。具体的には、文化的・歴史的背景の違う日本とアメリカにある両校が共通課題を設定し、それぞれ調査や研究を行い、その結果を交流することで、違いを意識し受容しながら協力して解決しようとする力を育成することをめざしている。本年度は「水」を共通課題に設定し、学習や研究活動を進めている。両校が位置する地域の水環境に注目し、それぞれ異なった切り口で課題を見出し研究活動を実施することで、全体として多様な角度や価値観からテーマに追っている。また、学習の進捗状況を e-mail などを用いて相互に交流するとともに、6月に E.M.S.の生徒が本校にホームステイで来校した際には、お互いの研究結果を交流しあうことで価値観や方法論の違いに気づきながら新たな課題を見つけることができている。

「国際（Exploris）」グループではこれらの実践を通して、異文化とふれることで自己理解を深め、他者の多様性を理解し、違いを豊かな違いとして受容し、グローバルな視点で課題が解決できる力の育成をめざしている。

③「国際（インドネシア）」グループ

「国際（インドネシア）」グループは、インドネシアとの国際交流を核に学習活動を行っている。インドネシアとの国際交流は、本校の生徒にとって初めて経験するアジア圏との国際交流である。生徒にとってインドネシアは、西欧諸国と比べるとあまり身近とは言いがたい。しかしながらインドネシアは、我が国にとって重要なエネルギー供給国であり、輸出入両面でも最大の貿易相手国の一つである。本グループの具体的な学習活動としては、広島ガス株式会社の協力者を講師に招聘して、インドネシア語についての語学学習を毎週1時間ずつ実施するとともに、インドネシアの歴史や経済、文化等についての学習、およびインドネシア留学生との交流を、協力者とともに立

案し実施している。また、インドネシアの中学校との日常的な相互交流や姉妹校提携などをも視野に入れ、そのスタートとして位置づけた活動を推進してきた結果、本校の教員・生徒とインドネシアの中学校の教員・生徒が、現在 blog 等を利用した交流を開始しているところである。

これらの実践を通して「国際（インドネシア）」グループでは、国際社会を生きる上で必要な資質・能力を育成するとともに、特に本グループでは、アジアの中の日本人としての認識を深めることの重要性に自ら気づかせることもねらいとしている。

④「福祉」グループ

「福祉」グループでは、高齢者や障害のある人に対して「優しさ」を具現化するために、「人に優しい東雲プランをつくろう」をテーマに設定し、今の自分たちに何ができるかを考え行動化することを目標とした研究活動を実践している。具体的内容としては、障害者との交流や車いすの介助、レクリエーションを通じた交流活動などといった直接的な介護・福祉活動とともに、福祉施設の清掃や作品展示などの間接的な介護・福祉活動について取り組んでいる。特に5月には、本校第3学年生徒の広島原爆養護ホーム「神田山やすらぎ園（以下やすらぎ園）」訪問について、清掃活動と交流活動を中心とした細案を計画し、訪問日当日は核となる活動をしている。細案の計画にあたっては、事前に「やすらぎ園」を訪れ、職員の方々と直接打ち合わせを行うことで、老人ホームでの仕事や注意点などについて学ぶことができ、単発的な交流活動に終わることなく、福祉の仕事について深く考えることにつながっている。

「福祉」グループではこれらの実践を通して、課題設定や問題解決能力の育成とともに、これからの少子高齢化社会で求められる考え方や価値観を涵養することもめざしている。

第3学年の「研究」の評価については、「指導と評価の一体化」にむけて、実践開始前に「研究」のねらいとその具体的目標を指導者から生徒に提示し、学習の位置づけを生徒と共通理解している。

それとともに、「学びと評価の一体化」をめざすべく、個々の生徒に対して年度当初に本実践でどのような力をつけたいか、それが教科の学習とどのように関連するか、そして実践を終えたときの自分の姿はどうか、将来の自分にどう役立つかを考えさせている。続いてそれらの整理をもとに、生徒一人ひとりに総合的な学習の時間における自己評価基準を設定させ、一定期間ご

との評価場面でセルフ・モニタリングを行わせている。このような取り組みを通して、個々の生徒に自己の学習状況を適切に把握させ（メタ認知）、学びと評価の一体化を図るとともに、自己実現に向けて継続的・統合的に自己の発達を評価できるような力の育成をめざしている。

6 おわりに

第1年次として、総合的な学習の時間を「キャリア教育」の視点で捉えなおし、プログラムの開発を行った。生徒に対して行ったアンケート調査やインタビューなどから、実社会で活躍するプロからの直接の学びを通して「なりたい自分」を夢として描き、「なれる自分」とのギャップを縮める生徒が増えてきているようである。このことから、本プログラムは「キャリア教育」を進める上で有効なプログラムの一つといえよう。また、この実践を通して、効果的な学習を組み立てるためには、常に学習のねらいを確認し、PDCAのサイクルを短期スパンで繰り返し改善点を明らかにしていくことが有効であることがわかった。この点からも実施したローテーション形式の学習プログラムは有効な学習システムの一つであると思われる。さらに、学校外の企業や関係機関と連携した取り組みを進めていくためには、カンファレンスを年間計画の中に位置づけることが重要であり、このカンファレンスは、学習内容を質的に向上させるだけでなく、教師の視野を広げることにもつながってくることが明らかになってきた。

次年度はこれらのことを評価・検証し、総合的な学習の時間のみならず、教科・領域におけるキャリア教育プログラムを構築していきたい。

引用・参考文献

- 市川伸一編. 学力から人間力へ. 教育出版. 2005
- 大阪におけるキャリア教育推進委員会 大阪商工会議所 人材育成委員会. 「大阪におけるキャリア教育推進プラン～一人ひとりの社会で生きる力を育み、明日の大阪を担う人材を育てる～」. 2005
- 梶 輝行. キャリア教育カリキュラムに関する理論研究. 神奈川県立総合教育センター研究集録. 2004
- 神原一之他. 「表現・コミュニケーション力」の育成を目指した総合的な学習の時間の実践. 中学教育第37集. 2005
- 国立教育施策研究所生徒指導研究センター. 「職場体験・インターンシップ現状把握調査」調査概要（速報版）. 2005
- 文部科学省. キャリア教育の推進に関する総合的調査

研究者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために～. 2004
藤森洋一.「中学校におけるキャリア教育カリキュラム

の開発—地域との協働を軸とした生きる力の育成について—」. 神奈川県立総合教育実践センター長期研修員研究報告. 2004